

宮川朝市の始まり

平成8年10月、宮川河川整備の進行に合わせて津山に新しい歴史が始まった。「ここで朝市を始めよう！」この心意気で始まった宮川朝市。毎月第2日曜日に必ず開催され、年を重ねることすでに8年目を迎えた。



実行委員長

長畑 勉(さん)沼



「この朝市は物を売るだけでなく、人と人とのふれあいの場、出会いの場となることが目的。特色のある店がそろい、地元産の物を地元で消費する運動のきっかけづくりにもなっている」と話す。

朝市を支えるボランティアの力



開催日前の水曜日、会場周辺には朝市の開催を知らせるのぼり旗が立てられる。さらに前日には会場内にテントや音響設備も整備される。これらはすべて近くの町内有志の手によって行われるボランティア作業。

ボランティアに参加した

門野 功(さん)上之町

「5年前に脳梗塞(しょうせき)を患って以来、健康管理には気を使っている。この作業を毎月担当することで責任感も生まれ、高齢化した町内会員同士の親睦や活性化にも役立つ」と話す。



お客さんとの出会いとふれあい

花、野菜、卵、魚、加工品など、さまざまな商品が屋台に並び、どれもが店主こだわりの商品。「さあ、買っていきましょう。」



こだわりの野菜を収穫する

久保豊子さん(金座)



80歳になった今も、50アールの畑を1人で管理する超元氣印。肥料は畜舎の乾燥たい肥のみ。農薬もほとんど使わない。「毎回楽しみに来てくれる人のために安全な野菜を作ることが私の生きがい」と語る。

人気の塩干の店を出す

三宅四郎さん(倉敷市)



「宮川朝市のことはイベントを紹介する本で知り、以来1回も休まずに出店している。他の朝市と違い、「この朝市へ来る人はみんな穏やかでいい人ばかり」。

朝市を楽しむ

午前6時、商品が店頭並び始めると同時に、待ちかねていたようにお客さんが訪れる。朝市の始まりは午前7時から知らされていた。準備のようすも少しは取材したいと思い、早めに出かけたのだが…。すでに朝市は始まった。30分もしないうちに会場はお客さんでいっぱいになった。人の動きに注目するのも「宮川朝市」の楽しみ方。人気の店はどこ？



この朝市が好き！

吉原和子さん(岡山市)



「都会にない独特の朝市の雰囲気が好き」と岡山から毎回通う。「この朝市は地元の人にも絶対おすすめ！」。

いっしょに朝市を訪れた

池田節子さん(林田)
河野玉子さん(志戸部)



「毎回、朝市とかかわっています」。

出店者のこだわり

朝市に毎回来てくれる固定客もついた。目当ての店のこの商品呼び込みにも一段と力が入る。自信がある商品だから、みんなに買ってもらいたい。人気の店には個性があった。

しっかりと見守られて

私たちにできることで少しでもにぎわいを作る力になれば。温かい思いの集まりに支えられて「宮川朝市」は育ってきた。準備作業をする時間はいつも同じ。ときがくれば人が集まり、手慣れた手つきで作業は進められていった。人と人が出会い、ふれあい、温かい心が通う。今日も地域の人たちにしっかりと見守られて「宮川朝市」は歴史を刻む。